

白磁に惹かれ、窯跡に網田焼の盛衰を見る。



県立宇土高校教諭(美術担当) 神宮司 正

私が県立美術館に勤務していた頃、ある平常展で、美術館所蔵の網田焼の展示がありました。展示品は確かな山や谷や樹木が描かれた『染付山水図皿』花の形を見事に表現した『白磁花形猪口(写真)』など四点程だったように記憶しています。これらの網田焼が持つ格調の高さ、清浄ともいえる白磁独特の造形美が私の目を引きつけ、心を動かしました。しかも、残存する網田焼は非常に少なく、めったにお目にかかることのできない貴重なものであることを知り、関心は高まるばかりでした。

その後、網田の近くの宇土高校に勤務することとなり、先に見た白磁の焼物が再び私の心を揺り動かすことになりました。着任後、しばらくして、網田焼の窯跡が残されていることを聞き、すぐにでも実物を見たいという衝動にかられました。



訪れる人もなく、昔の華やかな作陶生活の面影もありません。何か哀れで侘しい気持ちに包まれました。ただ、雑草の緑の中に野いちごの赤い実が鮮明に目に映り、網田焼の華麗で繊細な造形美を想い起こさせてくれたのが、わずかな救いとなりました。



かんや柿の木が植えられ、開墾が進んでいましたが、窯跡の周辺だけは雑草が生い茂り、窯の赤茶色の煉瓦壁が崩れ落ち、荒れるにまかせてありました。風雪をしのぐ仮の屋根が無造作につくられ、

「幻の網田焼」同様、昔の窯のつくりをわずかにとどめているにすぎません。

網田焼窯跡

細川藩の御用窯で、寛政四年(一七九二)、長尾利藤太が、肥前の陶工山道喜右衛門を招いて窯を開いたのが始まりである。網田焼は、この長尾窯が中心となり、良質の天草陶石を原料として盛んとなり、最盛期には八基の窯があった。山道喜右衛門は、天草郡高浜村(現天草町)庄屋上田伝五右衛門が肥前国大村領長身時津から招き、宝暦十三年(一七六三)、高浜焼を始めた山路喜右衛門ではないかと思われる。高浜焼がオランダ貿易を意識した色絵を中心としたのに対し、網田焼は染め付けが特徴で、茶器類が中心であった。文政五年(一八二二)、藩御用が解かれてからは、日用雑器を焼いていたが、明治以降は有田焼に押され、長尾窯も明治末期には火を消した。現在、県指定史跡となっている長尾窯は、最初一連房の平窯であったが、幕末に五連房の登窯となった。



心のふるさとと民話とわたし

国語辞典で「ほら吹き」のことを、おかげさなこと、でたらめをいう人と書いてあります。民話の中には「どんち」や「わざ」や、「じまん」くらべなどいろいろな民話があります。山鹿のホラくらべを読んで見ると、孟宗竹の回りが十丁で、さしわたしが三丁というところがあります。一丁は約百九メートルもあるそうですから、その話がかにおおげさであるかが分かります。また、その話の受け方もおもしろいのです。そんな大きな竹は見たことがないので肥後の土産にしたいというのです。昔の人は働いても働いても苦しい時、その苦しさを吹き飛ばすような笑いがあったのだと思います。ほら吹きで勝つことは、勝った方がそれだけ苦しいことが多かったのかも知れません。私たちは、どんな苦しいことがあっても、おおらかな気持ちをもつことが大切であると思いました。



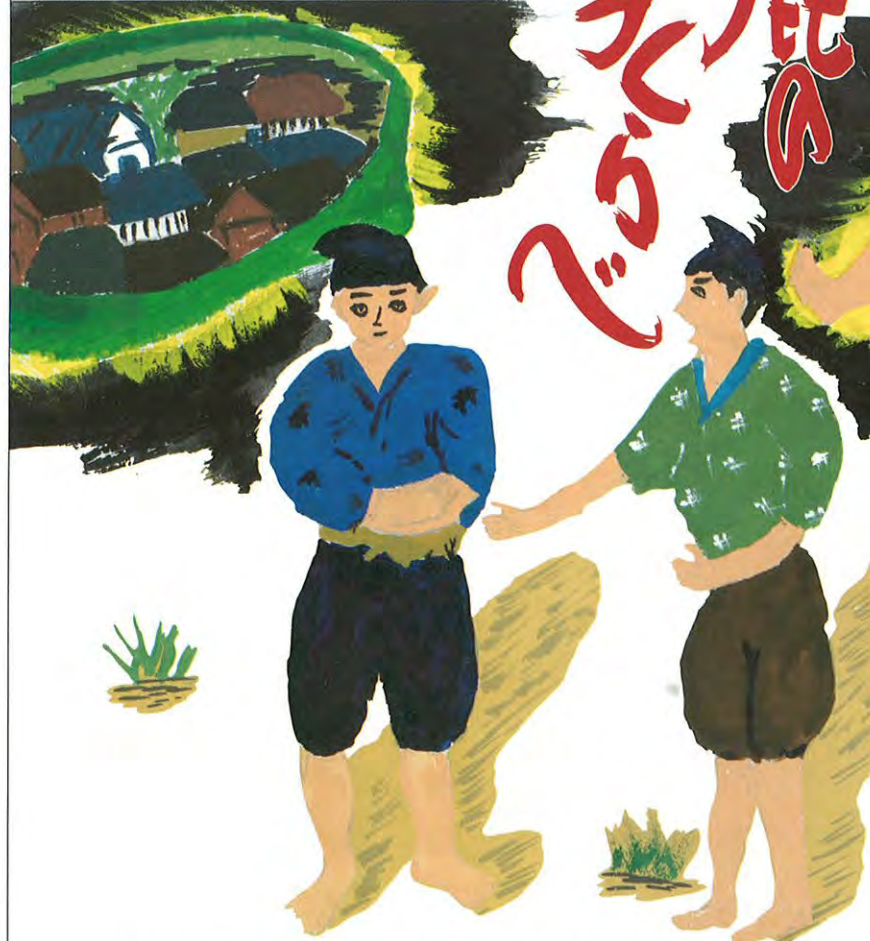
「山鹿のホラくらべ」あらまし

昔、山鹿の竹下(今の山鹿市津留あたり)にホラふきの名人がいた。あつちこつちから試合に来たが誰もかなわず、遂に肥後一番のホラふきと言われた。この噂を聞いて、筑後の大ホラふきがホラくらべを申込んできた。「よかたい。筑後からくるなら、こつちも肥後大ホラばふいてやる」。肥後の



●感想文 山鹿市立三岳小学校 6年 田中 貴子さん

●感想文 高橋 憲一さん



大ホラふきが手ぐすねひいて待ちかまえているところに、筑後の大ホラふきが乗り込んで来た。この試合を見ようと、村人たちが多勢押しかけ、さながら山鹿の温泉祭のにぎわいとなった。いよいよ試合開始。しかし、どちらもホラふきの名人とあって勝負はなかなかつかない。そこで、筑後のホラふきが、「山鹿あたりじゃ、どこを探しても筑後の赤ん坊に勝つ者はおるまい。生まれた時の重さが三十貫(約百キロ)。泣き声は小栗峠を越えて山鹿まで聞こえたそうなの。勝ち誇ってこよう言うと肥後のホラふきも負けてはいない。なんの、なんの。山鹿の日の岡山の孟宗竹は回りが十丁(約一キロメートル)、さしわたしが三丁。朝日の影が有明の海に、夕日の影が阿蘇の山にうつとだけんな。そんな大竹は筑後にはあるまい。「ほう、それは珍しい。ひとつその大竹を見せてもらおう」。肥後のホラふきもこれには困るだろうと見物人も心配したが、「よかたい、つんのちきなほり(ついできなさい)」。肥後のホラふきは平気な顔でさつさと歩き出した。筑後のホラふきをつれて竹下をひとめぐりすると、今十丁ばかり歩いて来たが、ここが太か孟宗竹のはえとつたところで、さつき言っていた三十貫ある赤ん坊が生まれた時、産湯のタライのたがにする竹ひごに使うと言った。竹の切り口の輪の中に田や畑ができて、この付近を竹下と言うようになった。これには、筑後の大ホラふきも降参して逃げ帰ったそうだ。